

【マティを偲んで】 —母性の‘コンテインメント(包容力)’をめぐる— (2012)

Anne Alvarez

マティ(Martha Harris)は心の広い寛大な方で、知性にも優れ、好奇心旺盛でもありました。精神分析そして文学に対するの熱情は紛れもなく、人に対しても深い慈愛を注ぐ方でありました。殊に、彼女は人を教え導くということには秀でた才覚をお持ちで、それは実にすばらしく、誰もが彼女と一緒にいたしますと大いに刺激され、さまざまに興奮をそそられたものであります。彼女という人となりや語ろうとしますと、まずその途方も無い豊かさには驚嘆させられます。彼女は料理自慢でもあり、そして趣味の園芸にも随分と凝っておられましたし、それにいつも彼女の頭の中にはアイデアがいっぱいといった印象なのでした。そして観察記録にしても、或いはセラピイの臨床資料にしてもですが、惜しげもなく彼女はわたしたちに分かち与えてくださったこととなります。彼女は明らかに、単純化しすぎること oversimplification そして病理的な解明 pathologization には関心が薄く、どちらかというところを忌み嫌っておられました。そうであるから、彼女がスーパービジョンなざる折には、それがセラピイ・セッションもしくは観察のいずれであっても、コメントをする際には、万遍なくいろんな角度から連想を紡いでゆかれて、聴く者にとってそれが丸みを帯びた描写 a fully rounded picture となるよう常に心掛けておいでだったというふうに思われます。だからといって彼女は決して不明瞭であったわけではありません。彼女は実に明晰でありました。しかし、事象の孕むところの豊かな複雑さを目の前にして、いちいち微に入り細を穿つといったふうに常に詳細にこだわったのであります。このことが彼女の著作物がドナルド・メルツァーもしくはエスタ・ビックに比べてあまり人々に知られていない、不人気ともいえる理由の一つではないかと私はかねがね思っております。なぜならば、概念的にそれらを分類わけし、ラベルを貼ることが容易ではないからであります。彼女は、譬えて言うなれば新聞などの記事のヘッドライン(見出し)を心に置きながら、脈絡を追うといった思考を決してなさらない方なのでした。患者についてその臨床像を捉える彼女のあり方というのは、偏狭さとは程遠く、自在にどんな角度からも攻めてゆける、つまりあちこちに目配りして全体を見失わない、丸味を帯びたイメージ a rounded picture であることを心しておられたように思われます。その事実は、もしかしたら人によっては欲求不満に陥りかねなくもありません。もしもあなたが彼女の語っているのは一体何がテーマで、ということが主要なアイデアなのかを掴もうと焦る思いがいくらかでもあるとすれば・・。しかしそれも彼女独特の解読スタイルともいえますが、ごく些細な事象 subtlety にも奥深くその目が注がれているわけであります。そしてなんととも言えないほどふっくらとした理解に溢れておまして、病理なるもの pathology についても許容的といいますか、破壊性 destructiveness を目の当たりにしても決してたじろぐわけでもありませんし、いちいち咎め立てすることなぞついぞなかったと言えましょう。そして、そういった重要かつしばしば極めて独創的ともいえる彼女のアイデアの片鱗が、まるで象嵌細工のように、あちこち彼女の書き綴ったものに嵌め込まれておりますので、われわれは見過ごしにせぬよう入念に読み込んでゆかねばと思うのです。

彼女はスコットランド人特有の発音(r)の響きの美しい語り口をなさってらして、とても品のいい、いかにもレディ然とした風情がありました。でもここで一つちょっと思い出したのですが、私が最初に参加

しました1962年の彼女の臨床セミナーでのことです。彼女は或る小さな女の子の患者が豚やら他の動物の真似っこをして遊んでた話をしまして、その折その子は実に自分の中の「子豚のわたし little pig part」について語ったということでした。それは実に大変な自己開示 revelation ともいえるものだったわけです。勿論、その後にはどのようなことが起きたか、それに比べれば大したことはないといえまじょうが・・・彼女は、患者の中の極めて癡猛で残忍 savage ともいえる感情そして行いについて語る事ができました。平然とまばたき一つしないで、もしくは彼女のやわらかな声を少しも変えずに・・・だが、その唯一の例外というのが印象深く尚も私の記憶に刻まれておりまして、それは【アンナ・フロイド(当時の名称はハムステッド)クリニック】でSarah Rosenfeldと論争したときのことでした。確か《赤ちゃんはそもそも対象関係的に生まれついたものか否か》というのがテーマでしたが、その折など意外にも彼女が闘志を露わにして牙を剥くこともあり、その熱情 passion の中にはやや癡猛さ ferocity も混じっていることをわれわれは目の辺りにしたわけでありませう。

振り返って憶いますに、マティの知性、理解力、そして寛大さといったものが常に彼女の判断力に絶妙なバランスをもたらしていたように思われます。或るときのこと、当時私は5歳以下の子どもを対象としたトレーニング・ケースでララという名まえの幼い女の子を担当しまして、その症例についてマティからスーパービジョンを受けておりましたが、ちょうどそれがセラピイの終了を迎えておりました。ところがその子は麻疹に罹り、セラピイを2週間お休みにせざるをえないことになったわけです。私は動揺し、ララが恢復したら、埋め合わせにセッションをあげなくてはと心積もりしていたわけませう。ところがマティは、その子にしてみれば、唯一そんなふうにはかたぶんセラピイから去ることができなかつたということではないかと指摘なさいました。ララは元々とても支配性の強い controlling 女の子でしたし、終結時点においてもそうだったわけませう。そしてマティは、そうした彼女の意向をわれわれとしては一応尊重するのがよからうと判断したわけでありませう。[その後私は敢えて、ララにサヨナラを言うためのセッションを最後に一回だけぜひとも許して欲しいとマティを説得した覚えがありますけれども・・・。]

彼女は、勿論のこと、‘仕事の鬼’と称されてもいい方でしたが、でも彼女とは気軽によくご一緒しては、精神分析について、もしくはシエークスピア、もしくは政治についてすらも、この上なく率直で濃密な意見交換をしたものませう。そうした自由闊達なお喋りの傍ら、彼女は農園の踏み石の間に蔓延(はびこ)る雑草を引き抜いたり、手を忙しげに動かすことを止めませうでしたが・・・。

彼女の著わした論文は、それにも似たような豊かさの感覚をわれわれに与えてくれます。時折それらは読み手に欲求不満を覚えさせることもありませう。なぜならば、これといった結論を欠いていて、しかも実にアイデアが盛りだくさんだからませう。そうした意味でも特に際立った典型的な例を一つ挙げるとしますなら、彼女の論文【Some notes on maternal containment in ‘good enough’ mothering】(1975)であります。[註: ‘母性のコンテインメントとは何か’(山上訳出)] ビックの母性の「コンテインメント」とウニコットの「ほど良い母親 good enough mother」とを繋げた、その手腕は実に見事といえませう。‘ほど良い母親’といった概念の領域に‘コンテインメント’の重要な構成因子があることを

明らかにしたものと思われます。彼女はそれを論述するにあたり、乳幼児観察のごく詳細を極めた実に感動的ともいえる2つの事例、さらには些か混乱ぎみの若い母親といった臨床例を媒介にしております。いずれの概念、‘母性的コンテインメント’も‘ほど良い母親らしさ’というも、その中身は十分に伝わります。しかし理論的な導入は明快であっても、その論文の結論は事例・症例の瑣末なことにあまりにも彼女の関心が注がれてしまっておりするため、どうやら理論的観点が失念されがちであります。もっと精確に申しますなら、彼女は読み手のわれわれに事のディテールをよくよく吟味するようにと促しており、もはや理論には興味が無くなっているともいえましょう。だが、われわれはこの2つの理論がどれほどそこに十全に語られているかを見るわけですし、そこでこれらいずれについても過度に単純化して考えてはならないことを教えられるわけでもあります。観察資料から窺われますのは、二人の母親のうち一人の方がどちらかという‘ほど良い good enough’と感じられますし、それに比べてもう一人の方はどうやら抑うつ感 depression に悩まされているように覗われます。しかしマティの物事を決め付けることを潔しとしない性格からして、そうした明言は敢えて避けられているわけです。しかしわれわれははっきりと二人がそれぞれに‘ほど良くあろう’とすることに相違があるとの認識を得るのであります。

先述しましたように、彼女は決して単純に‘ヘッドライン(見出し)’で括って物事を考えてゆくことの出来ない性質(たち)なのです。ピックやらメルツァーとも違って、彼女の理論的に叙述されるどころのことながらあまり人の眼を引かないのはそのためであります。その一つの例としてここで挙げていかんと思われれますのが、ピック(1968)とピオン(1962)とのコンテインメント概念の差異でありまして、それはこの彼女の論文中では殆ど表沙汰にはされていないふうなのであります。実のところ、この件について私は2,3年前論文にして発表したわけなのですけれど、その際マティのこの論文をもう一度丁寧に読んでおけばよかったと今更ながら悔やまれます。なぜなら彼女はすでにそれを語っているのでしたから！

ここで二人の赤ちゃん、チャールズとアンシアの事例に戻りましょう。チャールズの母親は子育ての経験もあり、愛情深いひとであります。読んでいくうちに徐々に分かってきますことは、彼女が殆ど毎回授乳を終えたあとすぐさま彼をコットに寝かせてしまう傾向があるということです。アンシアの母親とも違って、彼女は彼を抱っこしてやるのもごく稀ですし、それで一緒に遊んでやったり、話し掛けたり、あやしたりといったことがごく少ないといった印象が残ります。しかしながらマティは、チャールズの母親が幾らか物憂い状態にあったということ(他に3人も幼い子どもたちがいること、両親共が身罷っていること、他の子どもたちに湧き起こった嫉妬心にもひどく気遣わざるを得ないことなど)を充分指摘することはあっても、チャールズの母親の行為について些かもその落ち度 lacks を云々することはありません。しかしながら、彼女は赤ちゃんそれ自身についてその観察されたディテールのレベルで論議を進めてゆきます。そこでは、チャールズがよくびっくりさせられたみたいにかからだを強張らせ、そしていかにもからだがバラバラに崩れそうといった趣きを露わにする傾向があること、そしてやがて彼が身体的に自らを抱える方法を徐々に会得してゆくさまがよく覗われるのであります。彼が離乳を迎えるその前ですら、彼はいつもオッパイを吸う動作に気持ちのありつたけを集中させねばならないといった感じであり、つまり常にものごとに対して何かしら必死に気を張ってるような様子が覗われるのであります。

マティはまた、アンシアが母親の胸に顔をうずめることと、チャールズがコットの中で自分のからだを深くグイグイと沈ませるのを対照づけております。事実、彼のコットとの交流 interaction がどんなに重要かということは、そのディテールから読み手に伝わってまいりまして、とても興味深いところです。が、マティはそうした比較を殊更に強調することは致しません。彼女は、ごく有り体に申しまして‘母親バッシング’には関心が無いわけなのであります。その一方で彼女は、アンシアの母親が、赤ちゃんのパーソナリティに、そしていかにして親であるべきかを教えてくれる、そんな赤ちゃんの能力にとっても関心を向けており、実際のところすっかり魅了されてもいるといったことを語っているわけでありまして。しかしここですらも、マティは単純に母親たちを比較したりなどはしておりません。アンシアの母親の反応の良さ responsiveness に関わらず、彼女にも限界があることをマティは観察者に警告しております。すなわち、普段にも似ず、アンシアにひどくてこずらされた一日を終えたときのこと、赤ちゃんがやっと寝てくれて、彼女もまた眠りに就いたわけですが、もしあのままずっと赤ちゃんがむずかり続けていたら、さて自分はようになっていたものやらと一抹の不安を抱くのでした。言い換えれば、この母親は彼女自身と赤ちゃんとの相性がいいという点でたまたまラッキーだということを、マティは示唆しているのであります。

さて、ここで私はマティの理論上の貢献といえるものについてお話したいと思います。彼女の結論の中にそれが含まれていないと申しましたが、実のところそれが論文中にあるわけなのです。彼女はまずわれわれにこのように語ることから始めております。

プライマリーな母性対象の精神的成長 mental growth に欠くべからざる必須条件と申しますと、子どものパーソナリティに‘適切なるコンティナー an adequate container’となることでありまして、それはウニコット(1965)によって著わされているところの‘ほど良い good enough 母親’といったものであります。そこにある‘ほど良い’という意味合いにはどちらかという量的な違いが問われておりますようですが、それぞれ個々に母子間での相互間相互のディテールを綿密に観察してまいりますと、そうした違いとは別によりいっそう質的なものが構想されることになろうかと思われまして。つまり、‘ほど良い’ということの構成因子であります(1975)。(p.1)

それから彼女は、母子関係性が個々それぞれにユニークであることを認めることが重要であり、そしておそらく母子が互いにフィットしているかどうか、その相性も重要であることをも強調しております。それから彼女は、クラインからそのまま引き継いだところの認識愛 epistomophilic instincts へと移り、そこからビオンの‘コンティンメント’並びに‘夢想 reverie’へと話を展開させてゆきます。詰まりのところ、子どもが慰められていると感じると同じ程度に理解されていると感じられる feel understood ことを可能にしてあげるということこそが眼目になるわけでありまして。(Klein, 1921; Bion, 1962)。それから彼女は、ビックが‘コンティンメント’なるものをまた別の観点から見ているということをわれわれに語っております。すなわち赤ちゃんはその本来バラバラなパーソナリティの部分を一元的に抱えてくれる対象を必要としているということでありまして。それについては他の論文で(1998)で私がすでに述べましたように、ビオンの概念との違いは明らかです。彼女は、それに付け加えてくこうしたプライマリーなコンティンメント、もしくは

‘皮膚’機能(‘skin’ function)の発達がうまく促されなかったとしたら、その理由として考えられるのは、それが対象の有する何らかの欠陥 defects から生じたのかも知れず、もしくは子どもの内に摂り込まれたなんらかの‘空想の攻撃 phantasy attacks’ゆえにその子の統合された(そして統合されつつある)心のあり様が損なわれたといったことでもありましよう>と語っております。後者については、クライン流の見解 formulation としてお馴染みのものといえますが、前者についてはそうではありません。対象の欠陥 defects in the object ということを彼女が語っていることに注目したいのです。私は、ここ最近ずっと対象の欠如 deficit in the object について、さらにはセラピストが患者のそうした心の内なる対象の欠損 deficits をどのように修復し得るか、その方法とは如何にあるべきかを考察しておりまして、それを論文にしてきたわけですが、しかし私は、マティがすでに‘対象の欠陥’といったことばを用いて、かつてここまで大胆に語っていたということにまるで気づかずじにいたのであります！

後になって、赤ちゃんアンシアについての総括の中ですが、赤ちゃんがコンティンする母親を内側に部分的に摂り込んでいることにマティが触れた、実に魅力的なコメントがあります。そしてアンシアのその気力が失せて、‘実際の何か the real thing’を手にすることを彼女が必要とした瞬間についても…。そしてここにわれわれは、‘内在化された良きコンティナー’にとつての構成因子とは何か、幾つかその魅力的なりストともいえるものを彼女から教えられるわけであります。

この赤ちゃんは‘良き内的対象’を探ること、もしくは再現することに確かな能力を示し続けているように見受けられます。そうした良き内的対象にはいろいろ違った性質のものが考えられますが、先ず何よりも最初に「抱えること the holding」をあげていいでしょう。頭の上に置かれた手(the hand on the head)は、赤ちゃんの心身を一つに安らかとし(keep the baby’s person together)、その一方悪いもの(腸内ガス)を排出させるといった母親の機能を再現するものと考えられましよう。それから「‘空っぽ the emptiness’を充たす」といった性質であります。親指は乳首を想起させるものともいえましようし、興味深いことに、切迫した事態に陥ったその瞬間には向こうから助けにやって来てくれる‘coming’と分かっているかのようでありまして、それは恰も赤ちゃん自身の意識的コントロールに先駆けての内在化された対象の‘代理人 agent’といったことでありましよう。(p.16)

〔こうした‘恵み深くも能動的な benignly active 超自我’の例をAl Alvarezの著作『Night』(1994)の《夢》の中にご覧になることができましよう。〕 どうやらここでマティは、‘親指’を自己の一部分としてではなく、‘他者なるもの otherness’といった、自己とは別個に存在し行為するところの対象に同一化され始めたものとして見ているようです。そして赤ちゃんのアンシアは徐々に外的対象としての母親に向かい合ひまして、そのオツパイを与えられるときに心ゆくまで吸います。それから母親を口で、目で、そして耳で摂り込むといった経験から励まされるようにして、彼女を取り巻くもっと広い外界のディテールを摂り込むことの方へと気持ちを振り向けるわけであります。一つずつ、それもオツパイに向かうのと同じように心を込めて、ごく熱心な趣きでもって…。そして最後の総括で、マティが次のような文章で締め括っておりますのがとても興味深く思われます。

チャールズは、生後間もないこの時期、生き残り survival にひたすら気を奪われていたといえましょう。勿論そうでなければならなかったわけですが。そしてバラバラに崩壊しないように自らの身を守らんと躍起でありました。アンシアはこれと年齢的には同じ時期ではありましたが、彼女の苦痛をコンティンしてくれる信頼できる母親的对象 maternal object を内側に摂り込んだといったふうでして、観察からそうした証拠 evidence が覗われます。そして周囲のものに機敏に関心を向けながらも、彼女はもはやそれらのものにまるっきり依存しているとは言えないようであります。(p. 22)

マティは、これ以前にも総括の中で、チャールズがく外側の感覚的刺戟、例えば光だったり、時計のチクタクの音だったり、モノに触れた手応えだったりですが、そうしたものに魅せられていたり、直接その影響下にあって抱えられている場合には、どちらかと言うとからだがりより自己統一 integrated されているように見えます。ところがそれらが除けられてしまうと、自己統一がたちまち崩れてしまう disintegrated ようなのであります。(p.21)と述べております。外界のリアリティーに興味を覚えるという点でもこんなにも赤ちゃんによってはそのあり様が違うということはなんと興味深いことでしょう。ひどく依存的 dependent であるか、もしくはただひたすら興味深く眺めているか、そうした相違でしかないわけですが。こうしたちょっとしたことが指摘されているということが実に魅力的なのであります。そのことを私がうまく伝えられたのならいいのですが…。そうしたことはこの途轍もなく豊かさの溢れた論文の中には探そうとしますと実にたくさんあるのでして、これもただ一つに過ぎないわけであります。(訳; 2015/05/30)

※参考文献;

Harris,M.G.(1975). Some notes on maternal containment in 'good enough' mothering.
Journal of Child Psychotherapy. 4(1):35-51.

Bick,Esther.(1968). The experience of the skin in early object relations.
IJPA 49:484-86

Winnicott,D.W.(1960).Ego distortion in terms of true and false self.
In: Maturational Processes and the Facilitating Environment,1965.
London: Hogarth. Reprinted London:Karnac 1990.

Bion,W.R.(1962). Learning from Experience. London:Heinemann.

Alvarez,A. (1998). Failures to link: A attacks or defects? Some questions concerning
the thinkability of Oedipal and pre-oedipal thoughts.
Journal of Child Psychotherapy. 24(2):213-231.

※原典; Matteie on maternal containment

In 《Enabling and Inspiring. A Tribute to Martha Harris》

Edited by Meg Harris Williams. (2012) Karnac Books
